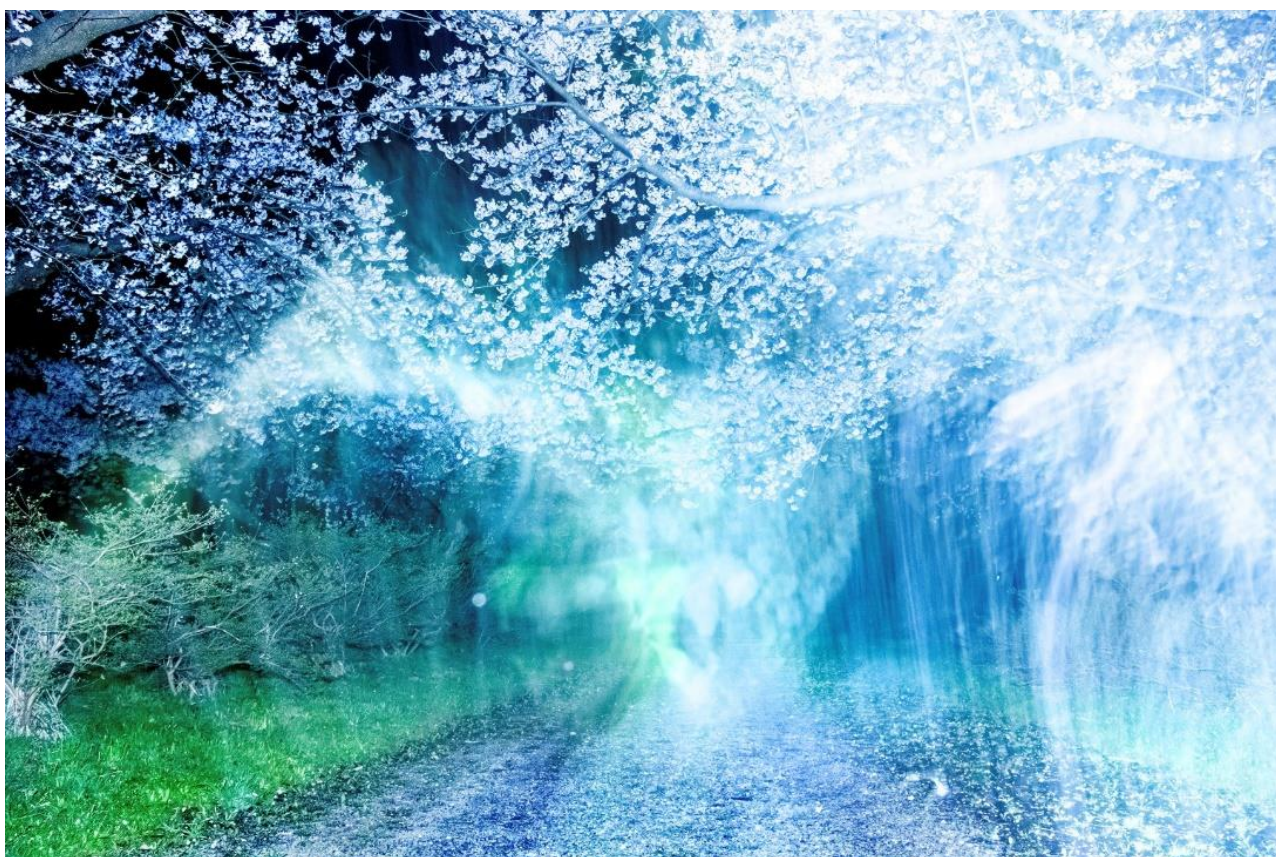


2020/7/27

あしたのひかり 日本の新進作家 vol. 17

Twilight Daylight: Contemporary Japanese Photography vol. 17

2020年7月28日(火) – 9月22日(火・祝)



岩根愛《Tenshochi, Kitakami, Iwate》〈あたらしい川〉より 2020年 インクジェットプリント 作家蔵

東京都写真美術館では、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するとともに、新たな創造活動を紹介する場として、「日本の新進作家」を2002年より開催しています。第17回目となる本年度は「象徴としての光」と「いまここを超えていく力」をテーマに、写真・映像をメディアとする5組の新進作家たちを紹介いたします。

なお、本展は、オリンピック・パラリンピックの開催都市東京が展開する文化の祭典「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の1つとして実施するものです。

展覧会概要

社会の急激な変化の中にある今、この時代は、既存のモデルやこれまでの価値観が揺らいでいる時代でもあります。先行きが不透明な時代の中で、いつしか人々が確かな未来像を心に描くことや、大きな希望を抱くことは難しくなっているのかもしれませんが。ときに美術はそうした時代において人々に、複雑な物事を見通す直感的な力や、明日への活力となる光を与えてくれるはずです。

「光」は写真・映像メディアの本質要素であるとともに、人々の日常に遍在するもの、また希望の象徴でもあります。本展の出品作家たちは、「光」を重要な要素としているだけでなく、自身を取り巻く世界の在りようについて独自のヴィジョンを持ち、それを視覚作品として私たちに開示してくれます。これらの作品は、ただ現実を鏡のように写し出すだけではなく、いまここにあり刻々と変貌していく世界をどのように感じ取るのかという世界観を表しています。それらは見る人の心に様々に共鳴し、未来への洞察や生きる力をも呼び覚ましてくれるかもしれません。

新進作家の写真・映像作品を通して、光に満ちたこの世界と、そしてその向こう側にある不確かな未来へと、いまここを超えていく力を感じ取っていただければ幸いです。

本展のみどころ

□ 東京都写真美術館がいま注目する、5作家の新作・代表作を紹介

岩根愛：2020年春に撮影された写真と、これまでにハワイや東北で撮影された映像でつづる〈あたらしい川〉。過去の歴史と現在が重なりあう、木村伊兵衛写真賞受賞作家による待望の新作を初公開。1930年代の回転式パノラマカメラ「コダック・サーカット」によって撮影された長さ8m超の大型プリント、3画面の映像プロジェクトなど、体感的なインスタレーション空間にも注目。

赤鹿麻耶：3年ぶりに発表される新作は、実在する「氷の国」をめぐる作家の空想を視覚化したシリーズ〈氷の国をつくる〉。写真、映像作品に加え66点組の水彩画など、多様な表現により、独自の物語世界を展開する。

菱田雄介：国境や紛争地域への取材を通じて、分断の歴史と日常を過ごす人々の営みに目を向ける気鋭の写真家／映像ディレクター。代表作〈border〉を通して、人間にとって境界線(ボーダー)とは何なのか？いま、あらためて問いかける。

原久路 & 林ナツミ：大分県別府を拠点に活躍する二人組の写真家ユニット。SNSを中心に作品を発表する表現方法も注目されており、フォロワーは1万人以上。代表作〈世界を見つめる〉を展示。

鈴木麻弓：欧州の写真アワードで高い評価を受けた〈The Restoration Will〉。亡き父が遺したレンズで被災した故郷・女川町を写し出す注目作品を公立美術館初展示。

□ 作家たちが見つめる「あしたのひかり」

「光」は写真・映像メディアの重要な要素です。今回紹介する新進作家たちにより作品個性豊かに表現される作品の数々は、目に見える「光」だけをテーマとするのではなく、「光」を象徴的に捉え、自身を取り巻く世界にどのように向き合い、どのように関わろうとしているのかについて、それぞれのヴィジョンを提示しています。

2020年、世界は新型コロナウイルスの感染拡大という大きな困難に直面しました。日常が大きく変化し、先行きが予測できない状況において、どのように未来を描いて生きていくのか。本展で紹介する新進作家たちの作品は、未来へ向かって生きるための新しいヒントに気づかせてくれたり、希望の光を感じさせてくれるのではないのでしょうか。

岩根 愛 Iwane Ai (出品点数31点)



《Haleiwa, Hawaii》〈あたらしい川〉より
2019年 インクジェットプリント 作家蔵

灯りが消されても淡く白い花の下を歩きながら、故郷を表したかれの言葉を思いだす

「誰もいなくなった桜の森に、四つん這いの鬼が徘徊する」

予期せぬ出来事で生まれた境界の向こうへ、かれは帰ることができないままだ

新たな境界に閉ざされたこの春、

発病するかのように狂い咲く桜の森を奪還した獣たちが一斉に集い、歓喜の呻きをあげていた

かれらが取り戻した暗闇にはあたらしい川が流れている

私は川を進む

(作家ステートメントより)

2020年春、誰もいなくなった桜の森で見た心象風景を探して、福島、岩手、青森の東北各地をたどり、制作された新作〈あたらしい川〉。写真と映像、過去と現在が交錯する、幻想的で私的なドキュメンタリー作品を通して、今ここに起こっている予期せぬ出来事と、さらにその先にある世界の姿をも見出そうとしている。

[作家略歴]1975年、東京都生まれ。1991年米ペトロリアハイスクール留学。帰国後96年に独立。2006年以降ハワイにおける日系文化に注視する。13年福島県三春町に拠点。ハワイと福島という二つの土地の歴史と文化をたどり、過去と現在を生きる人々の営みを重ね合わせた作品シリーズ〈KIPUKA〉で2019年第44回木村伊兵衛写真賞、第44回伊奈信男賞をダブル受賞。ドキュメンタリー映画『盆唄』（中江裕司監督作品、2019年）のアソシエイト・プロデューサーも務める。

赤鹿 麻耶 Akashika Maya (出品点数11点)



〈氷の国をつくる〉より
2020年 インクジェットプリント 作家蔵

「れいとうしつはね、いつだってまふゆのほっきょくよ。」

「オーロラがひかっている！こおりのおうちもある！」、これは子供のころ読んだお話の中に出てくる少女たちの会話。空想と現実の間にある魔法のような言葉。絵もある。彼女たちがおうちの冷凍室を開け、そこに広がる北極の世界をワクワクしながら覗き込んでいる。

私は今も変わらず、そのような世界がとても素敵だと思っている。ここではないどこか、に憧れ続けている。子供のころ、何かに触れ、胸がときめいたり、不思議だなあ、と心がぎゅっとなったあの“感覚の経験”の積み重なりが、ゆっくり長い時間を経て、今、「氷の国をつくる」に繋がった。

[中略]

「見ることと見ることで見えないどこに行く」、その魔法のような感覚の実体験をなかったことにしない、というのがこの展示空間に私が残していきたいもの、だ。

(作家ステートメントより抜粋)

本展では「氷の国をつくる」をテーマとした新作シリーズを初公開する。この物語の舞台は真冬の中国・ハルビン。冬の間だけ開催される実在する氷のテーマパーク「冰雪大世界」を旅の目的地として、約1か月間その建設から完成までを見続けた。旅のきっかけはインターネット上で見つけた「冷凍ヘアコンテスト」。「髪が凍るほど寒いとこってどこ？」という好奇心に端を発し、自身が見た夢について語った言葉、写真、絵や音など多彩な表現方法により、現実とファンタジーが混交する独自の物語世界を紡ぐ。

[作家略歴] 1985年、大阪府生まれ。2008年関西大学卒業。10年ビジュアルアーツ大阪写真学科卒業。11年作品〈風を食べる〉で第34回写真新世紀グランプリ受賞。大阪を拠点に海外を含む各地で個展、グループ展を開催。

菱田雄介 Hishida Yusuke (出品点数34点)



《Syrian Refugee Camp, Lebanon》

〈border〉より

2013年 発色現像方式印画 作家蔵

border

地図上に引かれた一本の線は、人間の運命をどう変えるのか。[中略]

「現在進行形で動く世界史を捉えたい」と考え、写真を撮るようになった。実際の現場に立つと、報道陣のカメラが集中するその傍らには、ごく当たり前の日常を過ごす人々の営みがある。その何気無い生活もまた歴史だと気づき、僕はそちらにカメラを向けた。そうして積み重なった写真が今回展示されている〈border〉である。[中略]

新型コロナの流行は、世界の孤立主義をより深めようとしている。21世紀はborderの時代となるだろう。地図上に引かれた一本の線の持つ意味を、これからも捉え続けていきたい。

(作家ステートメントより抜粋)

本展では、マスメディアの情報からこぼれ落ちる何気ない人物の姿に焦点をあてた映像作品シリーズ〈30sec〉のほか、作家が2007年から2019年までに、世界各地で撮影したポートレイトを中心に展示する。

[作家略歴]1972年、東京都生まれ。写真家・映像ディレクターとして、ボーダー（境界線）が日常生活にどのような影響を与えるかをテーマに、国境や紛争地域を取材したドキュメンタリー写真を手がける。2008年および10年写真新世紀展佳作入選。17年に南北朝鮮の人々をとらえた写真集『border|korea』（リプロアルテ）を発表、コンセプチュアルで象徴的な表現によって大きな評価を得た。

原久路 & 林ナツミ Hara Hisaji & Hayashi Natsumi (出品点数35点)



《三つ子ごっこ (めいは、よつば、さくら)》〈世界を見つめる〉より
2019年 発色現像方式印画 作家蔵

少女はある時期——幼女の終わり頃から思春期の始め頃まで——、女でも男でもない、菩薩の現身(うつしみ)であるかのような過し方をするように思います。自らの傲慢をいさめ、弱い者に寄り沿い、嘘とごまかしを憎み、普遍的な正義感の表現としての愛情を分け隔てなく示そうとします。[中略]

少女が体現する菩薩のような無垢。そこからわたしたち大人は何を汲み得るのでしょうか——。
ファインダーを通して彼女たちの眼差しを受けとめるたび、そう思うのです。

(作家ステートメントより抜粋)

彼らが2015年から手がけ、SNSを中心に発表してきたシリーズ〈世界を見つめる〉から、本展のために作家が厳選した決定版36点を出品する。子供から大人へと成長する過程にある無名の少女たちを被写体として、彼女らの自由な行動や発想から生まれるポートレートと地元・別府の都市風景からなる作品シリーズを、被写体の少女たちと共同で作品を制作するメイキング映像とあわせて展示する。

[作家略歴]2013年結成。原久路(1964年、東京都生まれ)と林ナツミ(1982年、埼玉県生まれ)による写真家ユニット。2011年以降〈本日の浮遊〉シリーズの共同制作を経て、14年、東京から九州へ移住、大分県別府市を拠点に活動し、コラボレーション作品を制作。

鈴木 麻弓 Suzuki Mayumi (出品点数30点)



〈The Restoration Will〉より
2017年
ゼラチンシルバープリント、
発色現像方式印画
作家蔵
(参考図版)

写真館を営んでいた両親は、2011年の津波で亡くなりました。生活の場であり、仕事の場でもあった写真館の跡地には、父の使っていたレンズ、泥だらけになったポートフォリオ、私たちの家族写真などが残されていました。それらを両親からの遺言のように感じ、丁寧に拾い集めました。

ある日、私は拾ったレンズで町の景色を撮ってみようと試みました。暗くぼんやりとした画像で、それはまるで亡くなった人たちが見ている景色のようでした。これらの写真を撮ることで死界と現界がつながるように感じるし、二度と会えないであろう両親と対話しているような気持ちになれるのです。

また、拾い集めた私の家族写真は津波のダメージを受けて白くなり、父が撮影した肖像画も画像の多くを失っています。それは町が受けた傷跡や私自身が負った心の傷に似ています。これらの写真の復元を試みることで、両親の遺志をつかみ取ろうとしています。

(作家ステートメントより)

出品作品〈The Restoration Will〉は「復元の意志」という意味。2011年の東日本大震災による津波で被災した故郷・女川町。写真館を営んでいた実父の遺品レンズを通して写し出される女川町の風景に、津波によって傷ついた、自身の幼少期の写真を効果的に挿入するという巧みな編集によって、強いメッセージ性を持つ作品となっている。17年Photobooxグランプリ受賞(イタリア)、18年PHOTO ESPANA International Photography Book of the Year受賞(スペイン)など欧州の写真アワードでも大きく評価された注目シリーズ。

[作家略歴] 1977年、宮城県生まれ。日本大学藝術学部卒業。2011年の東日本大震災をきっかけに故郷の宮城県女川町と被災した実家の写真館をテーマにした広義のドキュメンタリー作品を制作する。17年に作品集『The Restoration Will』(CEIBA EDITIONS)を出版。

出品点数

計141点（写真作品133点、映像作品5点、水彩画1組[68点]、資料等2点）

展覧会図録

出品作品図版、担当学芸員によるテキスト、作家によるステートメント、作家略歴等を収録。
東京都写真美術館発行、B5変形、160ページ（予定）

関連イベント

決定次第、当館ホームページでお知らせいたします。

開催概要

主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、東京新聞

会期 2020年7月28日（火）－9月22日（火・祝） [50日間]

会場 東京都写真美術館 2階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0099 www.topmuseum.jp

開館時間 10:00－18:00 ※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日（ただし8月10日、9月21日は開館、8月11日は休館）

観覧料 一般 700円／学生 560円／中高生・65歳以上 350円

※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

※本展は諸般の事情により内容を変更する場合がございます。最新情報は当館ホームページをご確認ください。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

展覧会担当 事業企画課 普及係 石田哲朗 t.ishida@topmuseum.jp

広報担当 池田良子 平澤 綾乃 岡田なつき press-info@topmuseum.jp